

## ある菊池恵楓園入所者のライフストーリー ——ハンセン病問題聞き取り——

福岡安則\*・黒坂愛衣\*\*

本稿は一人のハンセン病回復者からの聞き取りであるが、「ある菊池恵楓園入所者のライフストーリー」という茫洋たる題名を付したのは、その語りの内容が凡庸だからではない。逆である。私たちは、これまでに500人を超えるハンセン病の病歴者やその家族などからの聞き取りを実施してきたが、本稿の語り手、KMさんの語りは、その一つひとつが他の語り手からは聞けなかった新奇な体験に充ちており、なにか一つの体験談だけに焦点をあてての題名付与が困難だったからである。

KMさんは、1930年、大分県生まれ。戦時中の1942年、12歳のときに、菊池恵楓園に入所。療養所で治療しないままで自然治癒。園内で結婚した妻が妊娠するも、園の規則により墮胎。しかも、7ヵ月の胎児を自分の手で取り出したという。1960年頃、妻とともに社会復帰。ハンセン病に理解ある会社経営者と出逢い、回復者であることを明かして会社勤め。29年間の社会生活のなかでのストレスゆえに妻が精神的に追い詰められ、元号が平成に変わる頃に多磨全生園に再入所。2000年に菊池恵楓園に戻り、2004年から菊池恵楓園入所者自治会長。聞き取りは、2010年12月、恵楓園の自治会の一室にて。聞き取り時点で80歳。聞き手は福岡安則、黒坂愛衣。

戦後の時期に菊池恵楓園をめぐる起きた菊池事件（ハンセン病がらみで、無実のFさんが憲法違反の「特別法廷」で裁かれ、再審請求を求めているのに死刑を執行されてしまった冤罪事件）や黒髪小学校事件の舞台裏の語り、全療協本部役員時代の体験、2003年に熊本県下で起きた宿泊拒否事件に対する当事者としての考え、故郷の肉親との関係のありようなど、どの話も興味がつきない。

2012年6月、寮舎を訪ねて原稿の本人確認をしていただいても、2015年12月、ご逝去。享年85。本人確認の時点では本名のままの語りの公表の了解を得ていたが、すでに亡くなられ、公表にあたっての匿名化の配慮いかにについて再確認する機会を逸したので、ここではイニシャル表記にさせていただきました。

キーワード：ハンセン病，隔離政策，らい予防法，ライフストーリー

\* ふくおか・やすのり，埼玉大学名誉教授，社会学，yfukuoka196869@gmail.com

\*\* くろさか・あい，東北学院大学教授，社会学，kurosaka@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

本稿はJSPS 科研費19K02126の助成を受けた研究成果の一部である。

## 12歳で顔が歪んで

わたしは、昭和5年生まれ。〔生まれたのは〕大分県の田舎町、昔の宿場です。父は材木商と運送業をやっておりました。〔きょうだい〕男がわたしを入れて4人で、妹が1人です。わたしが長男です。

ぼくらのころは、小学校5年生ぐらいから、剣道、柔道は全校やらされてました。女は、薙刀。わたしは、相撲で県大会まで出ております。学校が軍事教練やらないといけないんで、剣道、柔道、相撲、すべて基本はやらされました。

わたしは6年まで皆勤じゃなかったかな。休んだことはないと思いますね。〔学校の成績？〕こんなこと言っちゃいかんけど、ぼくは1年から6年まで、ずっと級長です。

わたしはね、〔この病気が始まったのが〕12歳なんですすよ。12歳で、顔が歪んじゃった。〔わたしの病気を最初に〕誰が気がついたか。父親が毎晩、わたしと風呂に一緒に入り、いつも体じゅう触ってましたから、父親はなんとなくわかってたんじゃないかなあ。それで、この病気はですね、裕福なうちから出とったら、絶対嫌われない。差別、いっさいなし。小作人のようなうちから病人が出ると、もう徹底的な差別で、その一家が〔そこに〕おれないような状況に追い込まれていくんです。——それはここに入ってから、みんなから話を聞いて〔知ったことだけど〕。

〔うちはわたしの病気を周囲に隠すようなことは〕なかった。近所のおばちゃんなんか、わたしの顔を触ったりして、「顔、赤いねえ」なんか言って。学校でも嫌わない。近所でも嫌わない。学校の校医が、娘がわたしと同級生で、よくわたしのうちに飲みに来ては、「Mちゃんよお、おれの娘と結婚してくれやあ」ぐらい言ってた人で、心配そうに、いつもわたしの顔を触っていたりして。町じゅうがわたしの病気を知ってるんですけども、わたし自身がそれに気付かない程度で。ほんで、まあ、父親が「病気になったんだから〔療養所に〕行かないかんだらうなあ」と。わたしのうちは、20人ほど奉公人（ひと）が寝泊まりで飯を食ってる商家です。だから、病気がわかったら、父親としては家に置いとくわけいかない。それで、叔父さん、母の弟がわたしを菊池恵楓園（ここ）に連れてきた。

豊肥線で来ました。それでね、駅で、おばあちゃんと伯母ちゃん、ぼくの父の姉が、「さよなら、さよなら」って一生懸命泣くんで、なんであんなに泣くのおと思って。〔それまでに、警察官が入所勧奨に来たことは〕ない。〔保健所から白衣を着た人が来たことも〕ない。

〔この病気の人が近所にいるということはなかったか、ですって？〕あります。学校の裏庭に栗林があって、よく栗拾いに行ったりしよったんですが、そこに小屋を作って住んでる人が、いわゆる結節らいで、もう〔顔が〕こんなになってて。「鬼」とわたしは思ってたんですよ。それが、恵楓園（ここ）に入って、ああ、同病かって。〔それと、親族では〕母の妹が病気で恵楓園（ここ）に入ってた。〔そのことは、わたしは〕知らなかったけど。

## 治療なしで自然治癒

〔わたしが〕恵楓園（ここ）に入ったのは、6年生の夏休み、昭和17年の8月です。で、ここに入って、びっくり仰天なんですすよ。〔収容病棟に〕ご飯持ってくる人がみな、異様にびっくりするような人がご飯持ってくる。「ウワァー

ッ、怖い、という人が、わざとご飯を持ってくる。これがハンセン病療養所の見せしめって言うんですか。みんなに、そこで諦めさせるんですね。『いずれおまえもそうなるんだぞ、諦めなさい、』っていうサインですよ。〔でも〕ぼくはそういう〔諦めの〕心境になるのには、1年や2年かかりましたね。ほんわかほんわかして、いつでも帰れるという気持ち。父が毎月〔面会に〕来るし。ああいうもんでガクッとくるような心境にはならなかったですよ。

大風子という注射があるんですが、痛いから、わたしは逃げ回って、やっっておりません。わたしは治らい薬をいっさいやっっておりません。〔1回は〕やられたんですが、痛いから、逃げ回った。看護婦が呼びに来ると、トイレに入って戸を閉めて。それでも、わたしは、気がついたときはもう無菌と証明されておりました。自然治癒なんです。〔プロミンも〕やっっておりません。毎年検査して無菌なんですから、治療する必要はない。〔顔がちよっと歪んでるだけで、眉毛もあるし、髪の毛もふさふさしてる〕。

### 「非ライ」の人が大勢いた

みんながよく冗談に〔「KMさんも『非ライ』じゃないのか」と〕。というのはね、「無癩県運動」で、県の指令で、密告制度ちゅうのがあったんですね。体に異状ある人はみんな「らい」というふうに噂をたてられて、密告で強制的にここに連れて来られる。連れて来られて〔恵楓園の〕医者が診察したら、ハンセンじゃなかった。だからといって、村にはもう帰れない。村に帰れないから、カルテには「非ライ」と書かれておいて、その人はここで一生を終わる。昭和20年前後には80人ぐらいいましたね、病気でない人が。いまでも生きておりますよ、この病気じゃない人が。ぼくらには、もう、一見してわかりますから。ぼくらはね、60年、70年ここにおるんですから、大袈裟に言えば、この病気については医者よりも詳しいんです。

〔この病気でない人がハンセン病療養所に入所しているケースは〕たくさんあります。この恵楓園でもね、台湾で小学校の教員、夫婦でやっった人が、おかあちゃんが病気ひどくなって、引き揚げてきた。そして、男は先生だのに、子どもたちと女房連れてここに入ってきた。そういう人がけっこういるですよ。それとか、病気じゃないつれあいもここに入った。〔園長の〕宮崎松記さんは、どういう意味合いかわからないけど、それを黙認してましたよね。〔じっさい、男の働き手が療養所へ入っちゃうと、外へ残された奥さんと子どもが暮らしていけなかった。〕もう、村八分ですからね。

### 息子に食べ物を送り続けた父親

〔入所しても、名前は〕わたしは本名で〔やってきました〕。わたしはまだ12歳の子供でしたから、そういう〔入所の〕いきさつには、まったく無頓着だったですね。

〔入所したときの先輩患者を見てのショック?〕ありましたよ、それは。大変なショック。それで、おれは違うんだという感覚で、いつ逃げよう、いつ逃げようという気持ちでいました。わたしのうちは商家ですから、食いは〔よかった〕。ですからね、〔ここで出される食事〕これはとても食べません。それで、父に手紙で書いたから、1週間に1回ずつ、食べ物をドンと送ってきました。お菓子から餅からなんからかんからね。〔その小包はちゃんとわたしの手

元)に届きましたけれど、戦争がきびしくなる頃から、中身が半分、減りました。半分は、いまの福祉室、[当時の]患者係室で抜かれましたね。[でも、文句は]言えるわけないです。[最初のころは]ちゃんと届いてましたよ。それでまた、父が毎月1回来ますから。お魚とか肉とか炊いて、食べられるものをつくって、持ってきてましたから。

〔園で出されるご飯は〕麦ご飯ですね。それも少ない。〔食べ盛りの〕子どもたちでしょ。だから、大根の葉っぱを干したやつを刻んで、ご飯に入れて、水をはがっぽり入れて、雑炊にして食べるんですよ。そうせんと腹一杯にならないんだ。

### 少年舎での暮らし

〔ここに入って最初は少年舎でした。〕2部屋に30人ぐらいいましたね。布団は、みんなもう引っつきあっていましたね。〔寮父はいい人だったか、ですって?〕うーん、ぼくは、父親が相当おカネを渡してましたから、ぼくには特別扱いでしたね。そういう意味では、ぼくは職員(ひと)からの苛めとか蔑みの目はなかったね。いま考えると、なんかぼくは特別扱いされてたなあという感じ。

〔わたしがここに来た当時、園内の学校がありました。〕いわゆる寺子屋式。〔園内の入所者が先生をやる。〕そのうち1人ぐらいいほどの教員〔免許を持った人〕がいましたけどね。あとはみんな旧制中学を出た〔だけの〕連中ですね。ぼくは〔そこには〕いくらか通ったけども、〔むしろ園内の〕図書館に行っていた。〔けっこう本は〕ありました。当時の『中央公論』とか『改造』とかいう発禁本もありまして。それを読むと「読んじゃダメ!」っち言われたから、隠れて、隅っこで読んでました。もう、本の虫でしたね。〔ですから、わたしの思想は〕赤くなりましたけどね。

〔子どもでも、園内作業は〕ありましたよ。子どもでも働かないとまんま食えないという思想を植えつけられましたね。少年舎の庭の野菜は、ぜんぶ自分たちでつくった。大根でも白菜でもキャベツでも。そのころは消毒薬がないから虫がたくさん湧くでしょ。それで、赤土に水を入れて、それで虫を取った。4歳のちっちゃい子も一生懸命虫を取ってましたね。そうしないと、まんま食えない。

わたしなんか、入ってすぐ、いちばん高学年みたいなもんでしたから、これくらいの幅の、2メートルぐらい土を掘ったところに、落ち葉を入れて、トイレを汲みこんで、裸足で入って鍬で掻き込んで〔堆肥を〕つくってましたもの。冬なんかもう、そこに氷柱(つらら)みたいなのがいっぱいあって、辛い思いしました。ああ、うちに帰りたいなあ、と思った。

〔少女舎の女の子たちも〕30人ぐらいいました。この病気は、発病がわかるのがほとんど10歳前後ですが、〔じつは〕その前からもう病気は発病しておりますね。ここに入って子どもどうし話し合うと、「ああ、そう言われてみると、おれ、転んで擦りむいたけども、痛くなかったんだよ」とかね、「つねりっこして、おれ負けたことねえよ」とか。みんなそれを言って、「あ、それが病気だったのか」と。〔ただし、わたし自身はそういう経験は〕ありません。〔顔の歪みだけ。〕友達と川で水遊びすると、みんなが「わぁー、おかしい。口、曲がった。口、曲がった」って言うから、おかしいなと思った。それが12歳。

突然異変みたいなものです。[だから、ここへ入るまで自分の病名]もちろん、知りません。[ここに入ってきて]みんなが「らい、らい」って言ってましたから、「ああ、らいか」と。「らい」ってどういう病気かってだんだん知ることになって。いやあ、これは大変な、嫌われる病気になったもんだなあ。

子どもどうしがね、肝試しをやるんですよ。「おまえ、新患者だから、この塀を乗り越えて、外の店に行って、物を買ってこい」と。わたし熊本弁知らんから、「どういうふうにしやべればいいんだ?」「おごめんください」そういう言葉を使えって言うから、行って店に入ると、店のおばちゃんが出てきて、「ダメよ、ここに来ては。早よ帰らんと巡視に捕まるよお」と言われる。

でもまあ、少年舎に入っても、いちばん上の年齢でしたから、子ども同士の苦労もなかったんですよ。それで、わたし、ドオーツと毎月毎月、[父親が]物を送ってくるもんだから、みんなに配るでしょ。それで[子どものあいだでも]大事にされてたんですかね。

### 購買部の売り子をする

[少年舎にいたのは]14までですね。[そのあと青年舎に出ました。]三十二号っていう部屋。やっぱり20人はいたと思います。大部屋ですよ。ワンルームに食堂とお勝手が付いている。

[そして患者作業が]強制でしたね。わたしの寮に満洲浪人と言われた、恐ろしいおじさんがいましてね。ほんとの満洲浪人で、相当悪いことした人。「朝鮮ピーなんかを、ピストルを持って貨車に積み込んでは、満洲で売った」という悪いことをした人。[しかし、人間そのものは]とても大人物で、いい人なんです。その人が、わたしが三十二号室に入った翌日から、「おいで」って。購買部の住み込みの売り子。だから、わたしはそういう意味ではひもじい思いもしてません。物を売る売店と炊事場が隣同士で、物の行き来が相当あるんですよ。ですから、ほかの人は飯がなくて腹ペコペコでも、わたしたちは腹一杯飯食えた。

### 敵機来襲のなかラッパを吹く

戦時中は、ぼくは売店で売り子をしながら、青年団の喇叭手(らっぱしゅ)。走り回る伝令。一回はね、これは事実なんですけど、事務所の前に櫓(やぐら)が組んであるんですよ。「敵機来襲だ! 櫓に登って、ラッパを吹けえ!」って言われて、ラッパを持って吹こうとしたら、グラマンが低空飛行……。ほんとなんですよ、グラマンから見てると、わたしがこう見上げるのと、[お互いの顔が]見えるんです。喉がカラカラになって、ラッパが鳴らないんですよ。ひじょうに、それは恐かった。

そのとき、50キロ爆弾がパンパンパンパン落ちて、何人か死にました。機関砲も、バリバリバリバリ撃たれて。伝令で走ってるときに、バリバリバリーッと来るでしょ。病棟の前に防空壕がある。そこに飛び込むと、もうみんなが「ナンマイダ、ナンマイダ」言ってるもんだから、恥ずかしい話ですけど、わたしはおしっこちびってしまった。あんまり恐くて。

[防空壕掘りも]やりました。昼からは青年団の服着て。それは、ほんともう、肉体労働。——だから、わたし、啓発の[講演の]ときしゃべることがあるんですけど、青年団に入ったときに青年連中が「おい、新人よ。おれたち青



年団はなあ、30まで生きねえんだよ。おまえも30で死ぬぞ」って。

〔いろいろ重労働していると、指とか足とか〕ベロベロになります、みんな。10人のうちの8、9人まで、みんなベロベロになっちゃった。ぼく、それがなかった。〔ぼくはぜんぜん知覚麻痺もないから。〕

#### 敗戦の報に安堵

〔敗戦の日？〕覚えてますよ。売店のラジオのところにみんな集まって、陛下の、よおわからん〔玉音放送を〕やったときに、傷痍軍人の人がいましてね、音楽家でバイオリンも弾いてる人やったけど、その人がバイオリンをバーンとぶち壊したから、あっ、これは戦争負けたなあと思った。言っちゃ悪いけど、喜んじゃった。よかった、これで、死なんですむぞ。

そうは言っても、わたし、実家にいる頃は予科練に行くのが夢でした。従兄2人、予科練、七つボタンがいましたからね。わたしは、小学校6年のときは、バケツに水を半分入れて手に持って、空中転回できましたよ。それをやらないと予科練に行かれないというんで。それから、跳び箱もね、8段、自分の背よりも高いの、跳んでましたよ。それやらないと予科練に行けない。そういう時代もあったんです。

〔しかし〕療養所に入ったら、すべてから遮蔽されて、「塀の外には出れねえよ」と言われた。もう万事休すかなあと、徐々に徐々にそういう気持ちが生まれてきた。やっぱりね、職員が患者を蔑視してるのがわかりましたからね。いまでこそ変わったけど、当時は療養所の職員がいちばん差別蔑視をした。ですから、長島あたりで慰安旅行に行くの、バス会社がオッケーになっても、職員が止めたぐらいですからね、戦後。

〔戦争が終わったら園の中の生活が変わったか、ですって？〕いやあ、まったく変わらないですよ。もう、労働、労働、労働。食うモンはないわ。唐芋の粒々がテンテンと入っている澱粉。なんぼ腹減っても、それ、喉に通らなかつた。塩気もない澱粉って、とても喉を入らない。それで、わたしはうちに帰っては、米を腹に巻いて持ってきた。〔あのところ見つかるよ〕取り上げられたからね。

#### 故郷の友達は大学へ

戦争中は〔実家の仕事は〕軍需工場になりましたね。郡の製材業者ぜんぶが1つの会社になって、わたしの父が社長になった。〔だから〕戦争中でも、特攻機に乗る兵隊の機内食っていうんですか、森永キャラメルでも、絵のない白いケースに入ったキャラメルを、父がドツと持って来よった。それから、軍から黄色い自転車が来よったし。終戦後も〔進駐軍の〕ジープ、〔払い下げで〕もらって、山に行くのにジープで行けるようになって、うちで働く人たちは、昔は弁当箱で冷や飯食いよったのが、お櫃に入った、あったかいご飯しかダメだちゅうになってしまった。

わたしは〔戦後〕、15歳からずうっと、毎月うちに帰ってました。19歳まで。〔一時帰省許可をもらってじゃなくて〕逃走ですよ。それで、よく捕まるんですよ、巡視に。すると巡視が、「また、おまえかあ。おれが後ろを向いてるから、早よ走れえ」って。ウフフフ。

こっからね、その三里木（さんりぎ）っていう豊肥線の駅があるんですが、

そこまでだいたい4キロかな。[汽車でうちまで]3時間。近所はもう、「Mちゃん、帰ってきたなあ。きょうはうちにおいでえ」ちゅって、およばれに行つて。[仲のよい]町の同級生が6、7人いたけど、みんなわたしのとこに遊びに来て、「きょうは映画観に行こうよ」。それが19まで続いたけど、19でピシヤッとわたし帰らなくなったのは、町の同級生がぜんぶ大学に行っちゃったの。ものすごくコンプレックス持ちちゃって。ソんときの辛い思いというものはないよ。もう二度とうちに帰らんと。それっきり帰ってない。

#### 物資のない戦後を生き抜く

〔住込みの売店の仕事は〕1年ぐらいだったのかなあ。その髭の満洲浪人のおじさんがね、戦争が終わった時点で、このへんにあるドラム缶を毎晩運ばしたんだ。車力にドラム缶1本積んで、4、5人で運んだ。何十本も持ってきて、穴を掘って埋めた。そのドラム缶〔の中身はガソリン〕。よそはトラック走らなかった。ここのトラックは走れた。

それと、韓国人の入所者〔かた〕が、阿蘇から牛を盗んできては、ばらして。ぼくらがそれを売る。ぼくなんか、夜明けのまだ暗いうちに、牛の眉間〔ここ〕を玄能〔げんのう〕で、パーンと。一発で倒れるんですよ。で、腹をヴワツと割って、内臓〔み〕を出して。骨と皮を埋めて。で、ぼくらが車力で肉を運ぶ。〔それをやったのは〕何回かですよ。こんだ、恵楓園〔ここ〕の職員でそれを覚えた連中があちこちで、牛の半頭分か4分の1か知らんけど、籠で持ってきよったですよ。で、わたしたちが途中まで取りに行つて、それを運んで売りよった。〔売る相手は〕この園内の人。でも、職員がほとんど買いますね。

#### 病気の母を恨んだ

〔叔母が恵楓園に入っていたというのがわかったのは〕わたしがここへ来てからです。〔わたしが入ってきたときは、叔母は〕外〔に出ていたけど〕すぐ入ってきた。それもね、やっぱり、警察に密告されて。〔その叔母は〕しまいには、相当ひどくなって死んじゃった。

わたしの実母も病気で、父から離縁されてんですよ。〔母はわたしが〕小学校にあがる頃まで〔うちに〕いたと思うんですけども、いつのまにかいなくなった。わたしの母は恵楓園〔ここ〕に1年もいなかったと思う。母は離縁された時点で、社会復帰。〔療養所から〕逃げたの。裁縫ができたから、〔福岡県の〕八幡〔やはた〕あたりの芸者さんの着物を〔縫ってた〕。それを父親が経済援助してたようです。——〔だから、わたしの弟妹は〕みんな腹違いです。

〔わたしは自分の母親がこの病気だったってことも〕知らなかった。戦後、わたしが八幡を訪ねていったんです、こっから。ソんで、手がこんな手やったからね、〔母も〕この病気だってことを知った。それから10年ぐらい経つてから、母が年とって弱つたからね、わたしが連れに行つて、恵楓園〔ここ〕に連れ込んだ。そして、死んじやいましたけどね。

〔母が八幡にいるのがわかったのは〕わたしに会いに来よつたから、ここに。あのね、ほんとは、こんなことしゃべりたくないんだけど、自分が病気になった時点で、わたしはすごく親を恨みました。病気に対する世間の目。特別な病気だつていうことで、いわゆる部落の人たちと同じように、特殊視されてしまう状況に置かれた。それは母の所為〔せい〕と取りましたからね。それでひじょ

うに母を恨みました。母が死んだときに初めて、「お母さん、すまなかった」と思ったんであって、[それまでずっと]母が鬱陶しかった。母に対する「おかあちゃーん」という気持ちがまったくなかった。

[ちいさいときの母の記憶は]あります。ぼくのうちは商売でしょ。わたしの記憶のなかでは、母が洋服を着たのは知らない。いつも和服。片膝立てて、赤い、こんな長い煙管(きせる)で、パーッと[采配して]人を使ってきました。恰好いい人です。そのおきゃんな母親は知っております。[だから、再会したときは]むしろ、ぼくはしらじらしかった。

### 「増さん学校」の生徒

[戦後、たとえば栗生楽泉園では昭和22年に「人権闘争」が起きたが]ここは、意外と穏便だったんですね。昭和26年に全患協をつくったときに、やっと、患者団結という意識が燃えて、自分の存在を社会化するんだという思想(こと)は、みんなが持つようになった。ですから、昭和26年に、ここの本館をわれわれは占領しましたよ。本館に座り込みました。[わたしは]そのとき、二十歳(はたち)ぐらいですかね。

それでね、自治会とわたしが衝突したんですよ。「兵隊は鉄砲持って頑張ればいいんだ。銃後の人たちは、その兵隊を盛り立てるために、1人でも多く人を集めるといのが、闘争の基本だ」「あんたたちは、ガンガンガン喧嘩しなさいよ。われわれは1人でも多く集めるために、トランプをしましょう。花札しましょう。何して遊びましょう」って、人集めをするのが闘争の第一義だということをわたしは言ったんだ。それで、自治会からガーンとやられてね。[しかし]わたしが言うたことが実ってね、この近辺の共産党が赤旗立てて、ワァーッとわれわれの組に入り込んでいくんです。「ざまあみやがれ。おれが言ってるのは、ここだ」って、わたし言ったんです。[当時の自治会長は]Nさん。ものすごい、おひとよし。

[そのときの闘争では]われわれは義務作業を放棄する。それから3年遅れてですけども、[昭和]29年に患者作業を全面放棄したんです。予防法[闘争]が、だんだんだんだん盛り上がっていくんですよね。でも、そのときには、わたしはもう恵楓園(ここ)にいないくて、社会に[出てました]。

[ここで長年、自治会長をしたのは]増重文(ます・しげふみ)さん。ぼくらはね、「増さん学校の生徒」と言ってたぐらいで、この人の言うことを一生懸命聞いとけばいいんだという気持ちがあったね。この人、奄美のある島から強制収容されたときに、貨物船の船底に入れられて来た。それが生涯[忘れられずに]あの人の人間ができたって。権力とかそういうものに対する恐怖感はまったく持ってなかった。それをずうっと見てきてるもんだから、いまでもわたしはお偉いさんに対する、なんですか[萎縮する感覚が]まったくない。[増さんは、わたしより]20ぐらい上じゃなかったかな。増さんを、ぼくはほんとに尊敬してました。あの方がリーダーでなかったら、恵楓園も、いまの全療協、[かつての全患協]のトップとしてやっていけなかったんじゃないかな。よその療養所が「恵楓園に迫いつけ、恵楓園に負けるな」という状況だったですからね。

**F**さんは病気でも犯人でもない



〔昭和 26 年から 27 年にかけて起きた菊池事件のときは、わたしはまだ恵楓園にいました。〕わたしも増さんと一緒に〔医療刑務所に収監されていた〕F さんに会いに行ったことがあるんです。F さんの顔を見た時点でね、“ああ、この人は〔犯人と〕違う”と思った。妙なもので、ぼくら、ここに何十年もいるとね、ひとの目を見るんですよ。そんで、この人はどういう考えをもっているとか、この人はどういう状況かちゅうこと、だいたい〔わかる〕。意外と、そういうところには長（た）けるんですよ。で、わたしは F さんに会ったときに、F さんの顔をじいっと見て、“この人は無実だ”と思った。“絶対、やってないな”と思った。

やっぱり、裏があって。裏はしゃべるわけにいかんけども、でっち上げられたちゅうこと。——これだけ言いましょ。たとえば、わたしのうちの女中さんが嫁に行った〔相手の〕人が隣村の村会議員さんで、わたしよりも口がまっとうひどかった。県から「恵楓園に行け」と言われた。ところが、その人は、村会議員だから、ここへ来てません。その人の弟は病気が軽かったけど、その人が身代わりに来たんです。帳尻合わせ、そういうのがあるんです。

〔死刑にされた F さんも、この病気じゃなかった。〕あの人は、どこの大学〔病院〕を回っても、「病気じゃない」と言われた。ただ、子どものときから、障害者ではあったんですね。なんか片目が見えなかったとかなんとか。それで兵隊に取られてないんですよ。〔しかし、いったん〕ここに来れば、誰であっても百パーセント「そうだ」と言われるんですよ。

### 黒髪小事件の舞台裏

〔昭和 29 年の黒髪小事件のときですか？〕そのとき、わたし結核で〔病棟に〕入院してたけれども、だいたい耳に入っております。あれの元々の発端はね、瀬口〔龍之介〕というお医者さんが黒髪〔小の PTA〕のまとめ役でね。うちの〔園長の〕宮崎松記さんと、熊本の有名人同士が集まる倶楽部がありますよね、そういうところでお互い医者同士で、こう〔競い合う関係に〕なっていて、それが始まりなんですよ。

それで、わたしが嫌がる言い方の「未感染児童」〔の通学を受け入れるかどうか〕で学校が割れるんですよ。そんなとき、瀬口さんが〔反対派の〕先頭に立ちちゃったわけね。“おれは医者だ”っていうことで〔もっともらしい主張をして〕。だから、ほんとの純粋な差別（もの）じゃなくて、そういう変な裏もあるんですよ。

### 30 歳で社会復帰

〔ここにプロミンが入ってきたときの状況？〕よおわからん。だって、何年も無菌なのに、なんで治療する必要があるのか。それで、わたしは 15 歳からずっと毎年毎年、「社会に帰してくれ、社会に帰してくれ」って言うんだけど、「おまえは顔が歪んでるからダメ」って言われた。どうしても出してくれん。そしたら、志賀先生って、わたしが社会復帰した後にここの園長になった先生が、「おまえ、出たいか？」「出たい。」「おれが後始末するから、逃げろ」。

〔しかし〕わたしの父がずっと町会議員をしてたから、「そういう裏はいかん」つって、なかなか〔父の許しが得られなかった〕。

わたしはそれで、30 歳で恵楓園（ここ）を出るときに、父にも知らせずに女

房とふたりで出ました。そして、東京でアパートを借りて、自分でまんま食べるようになってから、自分ちに電話を入れて。「東京にいるぞ」と。

### 妻は子どもを生みたがって

〔結婚したのは〕昭和25年。それでね、女房が子どもをほしがってね。〔妊娠〕7ヵ月までわたしに隠してた。おなか出てきたもんだから、ばれて。それで、もう墮胎できないから、おなかの子どもに、頭に注射を2本打って殺して、死産さしちゃった。辛かったですよ。——というのがね、わたしが8ヵ月子なんです。8ヵ月の早産でわたしが生まれてきて、おかあちゃんはおっぱいも出なかったんで、おじいちゃんばあちゃんが牛乳で育てた子らしいんです。わたしは8ヵ月で生まれてる。自分の子が7ヵ月で死産された。

〔注射を打たれて〕女房が苦しみ始めたから、看護婦に「来てくれ」って。〔しかし〕来ない。あのころはもうチャランポランでしたからね。しょうがないから、女房の股ぐらにこうして。「どうする？ どうする？」って、摩（さす）ったら、破水っちゅうんですか、水がパーアッと顔にかかって、赤ん坊の頭が見えたんです。それで、わたしが引き出した。普通の赤ん坊は真っ赤でしょ。〔その子は〕青白くて、痩せて、細長い。それでも、髪から睫毛から爪からぜんぶきれいいにあるんですよ。それで、わたしが抱いて、女房に「どうしようか」ついたら、女房はもう目をつぶって、横に顔を振るだけで。ほおんとに、地獄でしたよ。

〔女房は〕わたしと同年。この熊本のね、八百年続いたお宮さんの娘なんです。熊本県下の有名人の娘が行くお嬢さん学校を出てるの。旧制女学校4年のときに、この病気が大学病院でわかった。ところが、そういう学校ですから、県に通知が行ってるのに県は卒業するまで知らん顔。学校も知らん顔。卒業した時点で、県が女房のうちに行って、「あんたのとこの娘さんは長島愛生園に隠しなさい」。女房の父親が「娘を、そんなとこにやりきらん」と。それで、恵楓園に入れた。〔入所したのは〕満で18、9ですか。入ってきて、わたしとすぐ〔結婚した〕。

わたし、結婚したときに、父親と別府の温泉で会ってね、「とうちゃん、籍を抜け。おれは熊本の電信柱のどっかに籍をつくる」と。したら父親が、「おまえは長男だから、籍は抜くわけはいかん。嫁さんをうちの籍に入れろ」と。それで、女房はわたしのうちに籍が入っております。〔当時、園内で結婚して籍を入れる人は少なかった。〕わたしが初めてかも。

そのときのわたしの結婚の状況がですね、さっきも言ったように、わたしはしょっちゅう田舎に帰りよったからね。寮長から「おまえみたいに〔素行が〕悪い患者は、そのことで、いつわしが監禁所にぶち込まれるかわからない。おまえの身代わりになって、おれが入るようになるんだから、結婚してくれ」と。そして、ある人が仲立ちみたいになって、女房とわたしを呼んだんです。それで、「K君、おまえ、この人と結婚しないか」「なに、失礼なことを言うんか。顔はチラチラ知ってる。でも、ものを言ったことないぞ。その人の前で、結婚するって言えるか？」と。したら女房が「結婚してください」と言った。お宮の娘は、あまり近所の子どもと遊ばないんですよ。それで、38畳ぐらいのところは何十人も一緒に住むのが耐えられなかったんですかね。心の拠り所がほしかったんですな。それが、結婚です。〔女房も〕手がちょっと悪かった

だけで、あとはどっこもどうもない。大風子は打ってたと聞きましたけどね。〔プロミンは〕やってないんじゃないのかなあ。

〔結婚しても住まいは〕いわゆる鶏の追い込みですよ。雑居部屋に男は夜這いです。夜だけ行くんです。だから、女房が泣いてましたよ。〔昭和 25 年でも、まだ個室の夫婦舎は〕ない。〔昭和〕26 年に、一千床拡張で、〔ここに医療〕刑務所ができたときに、患者をすこし黙らせるために“夫婦舎を作ってやるよ、”ということで〔作ったのが〕ハモニカ長屋ですね、4 畳半一つの。〔わたしたちもそこへ〕移れた。〔もうそのときは、死産の〕後です。わたしは幸いに父親の経済力があつたですから、女房を連れてしょっちゅう旅行に行った。

それでね、奄美和光園に行くと、子どもを産めたんですよ。このみんなに、「おまえらは若いんだから、奄美に逃げて、子どもを産め」と。わたしは、心が相当揺らぎましたけどね。わたしが病気になって、親を恨んだのにね、病気のおれが子どもを産んだら、その子がわたしに対してなんと思うか。わたしほど親を恨んでいるのはいないのに、この子はどういう気持ちになるか。わたしの子であれば、そういう子であろうと。それが辛くて、女房が「産もう」というのを、わたしが「堪（こら）えてくれ」と。それと、女房のうちもわたしのうちも、どっちも義理の母。女房の母は〔小学校〕3 年のときにカリエスかなんかで亡くなってるんですよ。両方とも義理の母親であれば、〔自分らの子どもを育ててくれという〕話は持ち込めないね。

〔恵楓園は、結婚即断種じゃなくて〕妊娠した場合に断種と墮胎ですね。それでね、女房が、うっかり、わたしが断種したच्छゅうことを兄貴にしゃべったら、殴られたそうですよ。「おまえはいいだろう」と。「男が、生涯、男でなくなつたんだぞ。この馬鹿野郎」つって、兄貴が女房を殴つたんですね。——もうみんな亡くなっちゃって、女房は天涯孤独なんですけどね。〔女房は〕この前危篤になつたし、いまは、なんとか〔持ちこたえているような状態です〕。〔入院してから〕もう 7 年かな。

#### 片道切符で恵楓園を出て

〔恵楓園を出るときは〕片道切符なんです。〔園当局から〕東京に行く汽車賃は出た。それだけ。〔軽快退所とかの〕証明書はもらわなかったね。恵楓園（ここ）の係がね、「K さんは、結核カリエスでからだ弱いんだから、ここに籍を置いて出なさい」つて言った。〔わたしはここで結核をやつたことがあつたんだけど、恵楓園を〕出る前にね、わたしは子どもたちの世話役として、子どもと野球して、自分の体力の自信ついたので。それで社会復帰したんです。

その結核もまた因縁〔話〕があるんですよ。医者が土足の長靴履いたまま部屋に上がってきよつたから、わたしが「先生、あんた、失礼じゃないか」と。「畳の上に土足で上がってきて、わたしの前で胡座（あぐら）組んで、診察する。冗談じゃない。帰れ！」つったの。たら、「いや、きみはひどい病気だ。」「いいんだよ。帰れ！」それから 10 年間、わたし結核になつちやつた。

それで、社会復帰するときに、「そういう病状だから、あなたはここに籍を置いて出なさい」つて言われて、「なにを言うか。二度と帰ってくるか。籍、抜け！」つて言つて、籍を切ってもらつて出ました。

〔ここで女房と結婚しても〕絶対、出るぞと。女房にも「出るからのお、出るからのお」つて言つた。それで、女房の父親が神主で、学校の教員でした

よ。そのお父さんは、終戦の年に学校の教員を辞めてるんですよ。「おれは、間違っただ〔軍国主義の〕教育をしてしまった」ということで。そのお父さんから、わたしたちが東京に出たとたんに、「やっと、おれも往還を歩けるようになった。ありがとうよ」って手紙が来ましたよ。

わたしの父親も、3ヵ月に1回、上京してきました。でも、わたし辛かったのはね、ひょっと父親の顔を見ると、にいと笑うんですよ。それが辛くてね。

「ああ、とうちゃんのほうがおれよりも辛い思いしてるわあ」と思ってね。父親はわたしにもものを言いきらんものだから、女房を一生懸命かわいがりましたよ。でもねえ、これがおもしろいんですよ。朝、「とうちゃん、これから会社に行ってきます」ちゅうと、「まあ、待てや。ちよいと一杯、酒飲んで行け」。「なに言うの。おれ、車を運転して会社に行くんぞ」。「まあ、酒ぐらい飲め」。わたしんちは商売人ですから、菰（こも）でお酒を朝昼晩飲んでましたからね。そういう父親ですから、「酒、一杯飲め、一杯飲め」。しょうがないから、コップで「いただきます」って飲んで、「行ってきます」。ウフフフ。

〔東京へ出てきたのは〕東京に知った人がいたな。えっとね、草津の療養所の職員の方で、2、3回会ってます。菊池の山の奥で殺人事件が起きた。あの事件のとき、〔犯人とされたFさんの〕子どもを引き取った人です。その人とわたしは、なぜか知り合ってた。わたし、埼玉県の山奥に何回か行ってるんですよ。

#### 承知の上で雇用してくれた社長

社会復帰して東京に出てきて、会社をぐるっと回ったけど、やっぱり、この顔で雇ってくれるところないんですよ。それでも、ある会社に行ったらね、ウン、社長がわたしの顔見る。「あ、わたしは菊池恵楓園というハンセン病療養所から許可を得て出てまいりました」って、こう言ったらね、「うん、いいよ」と。〔社長は〕ぼくの病気のことを会社で隠さなかった。「K君は顔が歪んでいるけど、ハンセン病の病気が治ったらしいんだよ。だから雇ったから、よろしく」って。トップがいいと言えば、みんないいんですよ。だから、会社のなかで、「Kさん、ぼくはシュヴァイツァー博士を尊敬しております」とか言うのも出てきたしね。女の従業員なんか、「あんた、ほんに、らい病なの？」ちゅうから、「うん、そうだったんだ」。「おかしいなあ。らい病、手がこうしてるでしょう？」ちゅうんだ。

〔わたしを雇ってくれた会社は〕飾り職専門。女物の、金銀プラチナを使う飾りとか指輪とかね。わたしは時計の部品のほうにいたんですけども。社員そのものは30人ぐらいしかいないけど、飾り職人がワツといる。わたしたちが製図を引っぱると、それを職人がつくって持ってくる。それをまた機械に入れて製品にして、問屋に卸す。

〔会社は〕儲かって儲かってどうしようもない。わたしの給料は、ボンボンボンボン上がるしね。慰安旅行も、天皇家が泊まるような高級なホテル。社長に「そんなことせんで、ちっとゼニくれよ」。「いや、これをやらんと税金取られるんで、勘弁してくれえ。カネ撒かないと、どうにもならんのだよ」と。

〔ほんとにその社長は〕おもしろい人〔でした〕。こんなこと言っていました。「〔秋田の〕ぼくの村に、きみとまったく同じで、口が曲がった人がいた。村の人は、しかし、嫌わなかったよ」「ただし、結婚はイトコどうしでしたよ。

嫁に行く人がいなかった」。

当時は、みんな弁当を持っていくんですよ、会社に。みんなで飯を食いよると、社長が立ち上がって、箸もって来て、ぼくンとこのおかずを食って、「うーん、きみのおかあちゃんは〔料理が〕なかなかうまいなあ」なんて。これもひとつの、社長の、わたしに対する配慮（なん）ですな。ああ、社長の演出（あれ）だなと思った<sup>1</sup>。ぜったい、嫌わんかったなあ。正月なんか、社長のうちに飲み食いに行きよったもん、ぼくは。

#### アパートの住人の偏見差別

女房は〔ある会社に〕経理事務として入ったんですが、女房はお嬢さん学校〔出〕だから、算盤はじけないんだ。ぼくは自分ちが商売ですから、子どものときから大きな算盤をはじめてましたし、恵楓園（ここ）に来て、事務所で物を売る係をしてみましたから、デパートの店員よりもわたしの算盤のほうが正確で速かった。自信を持ってたから、女房に一生懸命、頭をこづきながら、算盤を教えた。2ヵ月か3ヵ月でね、わたしよりうまくなっちゃった。女房はわたしに口答えしながら、タッタッタッタッやっ、わたしよりも正確で速くなった。それでもね、40のときに、女房がわたしに「煙草吸わしてくれ」って言ったから、ドキッときたんですよ。「そうか、苦労してるか」と思った。それで、「おれの給料がうんとよくなったんだから、もう会社辞めなさい」つって、辞めさせたの。

そこまではいいんです。〔しかし〕アパートは3回変わった。アパートでは、「Kはらいだ、らいだ」というのが、バンバン広がっていくんです。東京の板橋のアパートの連中が、わたしの顔を見て「らい」だっちゅう。みんな、わかるんですよ。そこにおれなくなる。3回目のときは大家さんのとこまで、「Kはらいだから、追い出せ」って言ってきた。大家さんは大家さんで、「Kさん、いいんだよ。あんたは、きちんと家賃払ってんだから。人がなんと言おうが、おりなさい」って言ってくれた。でも、女房がね、頭が壊れちゃった。「玄関でらいと言ってるよ」とか「窓に人が立ってるよ」と言うようになった。徘徊はするわ。もう、どうにもならなくなってしまった。

それでね、子どもはいない。ふるさとには帰れない。東京の板橋には29年いましたが、多磨全生園へ逃げ込んだんです。平成になる前です。

〔アパートの人間関係は〕どうにもならなかったなあ。だいたいみんな知ってるんですよ。〔生粋の〕都会育ちの人は知らないけども、東京はみんな地方からの二男、三男が集まったとこでしょ。田舎から出てきた人は、密告制度やらなんやらかんやらで、しっかりもう身に付いてるんですよ。

〔しかも〕わたしがいたところは、渋谷栄一が養育院を作ったところなんですよね。光田健輔が医者になってそこで初めてこの患者を〔診察したところ〕。米屋に行くと、わたしと同年の人が、「Kさんよお、〔昔〕この上にらい病が

<sup>1</sup> 今後の「ハンセン病に係る偏見差別」の解消のための人権教育・人権啓発のありようを考えると、たんに「わたしは人を差別しません」という人間を育てるのではなく、このKMさんを承知の上で雇い、弁当箱のなかからオカズを取って、みなの前で食べてみせるというパフォーマンスを積極的にやってみせた、このような active な人間が育つことを目標としなければならないことがよくわかる逸話だ。



いてな、おれ詳しいんだぞ」とかって。何代目か知らんけど、よお頭に入ってるんですよ。で、「きみも苦労したんだなあ」とか言って。〔その米屋とは〕一緒に飲み食いしよったから〔悪い人じゃなかったけど〕。

#### 定年延長で全生園から通勤

それで、わたしが〔勤めた会社は、わたしが〕55で定年になっても、「もっと働けよ」というんで、60まで〔働きました〕。〔じつは〕55歳のとき、父親が亡くなったから、「わたしは長男ですから大分に帰ります。辞めさせてください」と。ところが、会社から年賀状が行ったら、わたしが大分にいないことがわかって、電話帳で調べたら多磨全生園にいたわけ。それで、社長から電話がかかってきて、「K君よお、おまえの居所わかったぞ。おれ、そっちへ行くか」って言うからね、「いやあ、来なくていい」って。「もう一回、悪いけど、会社に来てくれんか」ちゅうからね、全生園から5年間、通ったんです。

#### 帷子が脱げた感じの予防法廃止

〔全生園には〕10年ぐらいいました。〔恵楓園と全生園の違い？〕あのね、菊池〔恵楓園〕は南方系というか、おおらかなんですよ。多磨全生園は東北系というんですか、垣根から他人（ひと）を覗くような生活環境にある。だから、暮らしにくいところではありますね。おおらかなところがない。余所者（よそもん）を嫌いますね。わたし〔自身〕は〔東京暮らしが長くて〕東京弁しゃべってたから、そんな違和感はむこうも持ってませんでしたけど。

〔わたしが全療協本部の中央委員をやったのは〕平成10年から12年までです。〔わたしが全療協の中央委員をしているときの大きな問題は〕大雑把に言えば、社会開放ですよ。〔平成8年の「らい予防法」廃止をどう受け止めたか、ですって？〕それはもう、わたしは社会で苦労して、「らい予防法」があるばっかしの、わたしは文句一つも言えない。言われる通りに下がらにゃいけなかった。廃止になったちゅうことは、もうほんとに帷子（かたびら）脱げたッという感じです。万歳、万歳ですよ。〔しかし〕療養所の入所者（ひと）というのは、みな、もう60年、70年いる人ですから、ほんの一握りの人しか〔反応しなかった〕。〔だから、わたしが〕迂闊にそういうことを言うと、「なんだ、〔そんなことを言うなら〕おまえら出て行けよ」と。

なんていうか、わたしが夫婦とも厚生年金もらってるでしょ。女房は恵楓園（ここ）におるときから〔国民〕年金〔の掛金〕を納めてましたからね。厚生年金も、わたしよりも少ないんですけど、65からもらうようになった。わたしは60から厚生年金もらうようになった。それを迂闊に言うと、療養所（あすこ）の人たちは、とても嫌がる。経済が差がつくと嫌がる。

#### 全療協本部役員として精根尽き果てた国賠裁判

わたしが恵楓園（こちら）に帰ってきたのが、平成12年。〔その翌年、平成〕13年に裁判が勝ったんだ。〔恵楓園と敬愛園から第一次原告13名が出た違憲国賠訴訟をどう思っていたか、ですって？〕いや、これがもう、話すると大変なんです、裁判、もつともだ、やらなきゃいけない、というのが全療協〔本部〕の思想だったんです。全療協はたびたび全支部長集めて、「理解してください。裁判をやらなきゃいけないんだ」と言うても、うまくいかない。「13園、

全園が裁判に打って出ていかなきゃいかんのですよ」と、いつから言うても、まったく返事が返ってこない。全療協〔本部〕は辛かったんですよ。

それで、もう悔しくて悔しくてしょうがなくて。まあ、そこに行く経緯(いきさつ)はいろいろあったんでねえ。裁判の原告団が全療協になぜもっと早く言ってくれなかったのか、と。〔第一次原告の一人で〕恵楓園(ここ)の志村〔康〕から、わたしどもに手紙来ました。原告団に出ると。それで、わたしもびっくりして、「あ、こういうことが起きてンのかあ、ちゅんで、すぐ〔全療協事務局長の〕神〔美知宏〕(こう・みちひろ)さんにその手紙読ませた。神さんは、「お、これはいかん。これは、全療協が走らないかんぞ」ちゅうことになったんですよ。でも、鞭叩けど馬走らずでね。困った。

それで、わたしが恵楓園(こっち)へ帰ってきたら、すぐ国宗〔直子〕弁護士が来て、「Kさん、原告に入ってくれ」と。「冗談じゃないよ。おれはもう、根が尽き果てた。原告団には入らん」ちゅって、最後まで入ってないんだ、わたしは。「おれも意地がある」と。

もう、さんざん苛められたんだから。奄美和光園に〔九州5園の〕ブロック会議で全療協〔本部〕から行ったときなんか、恵楓園(ここ)と敬愛園〔の自治会長〕が「全療協を脱退する」ちゅって、わたしは徹底的に小突かれてんですよ。そういう修羅場をくぐっていますから。

〔最後の段階になって「みんな入ろう」というふうになったのは〕四国の〔大島青松園の〕指導者が、全療協の会長までやって、自治会長も長年つとめた人で、曾我野一美(あのひと)が〔原告に〕立ち上がったたら、みんながワツとなった。だから、〔もっと早く〕それをやれって言ったんだけど、どこもやらない。わたしも妙にひねくれてしまって、もうソッポ向いてしまった。それで、ここに来たときに、大分の、いまはお互いに心を割ってるんですけど、徳田〔靖之〕弁護士(せんせい)、あの先生と道で会ったとき、ポッとわたし外向いて行きましたよ。アッハハハ。ほんとに、全療協、苦労したんですよ。というのね、各支部長の気持ちもわからんことはない。原告団には一握りしか〔入ってなかった〕。あとはみな〔国を相手の裁判に〕反対でしたからね。

志村〔康〕もわたしも、同じ三十二号室にいたんですから。増さんとおなし部屋にね。それで、わたしは療友(ともだち)に「志村は、〔裁判に〕負けたら、首を吊るぞ。しょっちゅう目をつけとけよ」って、よお言うちゃった。

〔あの裁判で〕東京地方裁判所には〔弁論期日のたびに〕わたしは全療協としてかならず〔傍聴に〕行ってたんだ。厚労省の言うことは、もう、しっちゃかめっちゃか、しどろもどろ、〔傍聴席の〕みんなクスクスクス笑ってましたよ。

#### 恵楓園に戻って妻の介護

〔いっぽう、女房は女房で〕多磨全生園に逃げ込んだら、「あなたはなんで、わたしをこんなところへ、また連れ込んだんだ！」つって、ものは言わなくなるわ、一緒に飯を食おうとしなくなるわ。これにはまいりましたね。どんどんどんどん頭がおかしくなっていくんで、全療協〔本部に〕2年つとめたけれども、もうどうにも全療協もつとめられなくなってしまった。そんで、熊本弁をしゃべるところなら、すこしは元に戻るかなあと思って、40年ぶりにこっちへ帰ってきた。

でも、どんどん悪くなっていったね。「ちょっと買い物に行くから、じっとしとくんだよ」つって出ると、すぐ、近所近辺に、「主人がわたしに内緒でどっかへ出ていった。どこへ行ったんでしょう？」このなかで徘徊するしね。行方不明になるし。うん、苦労しました。

〔ここに戻ってからは〕女房〔の介護が大変でした〕。もう、風呂に入れたとき、こっちのほうが大変だった。女房のからだを洗って、抱えるのがもう大変なんだ。ぐにょんってなってるんですからね。わたしのほうがへたり込みよった。それで、女房を部屋まで上げて、飲み物をやって、「ちょいと風呂へ行くからじっとしとくんだよ」つって、わたしはパーッと風呂で、タッタッタッタと洗って。こらもう、大変でした。

それで、女房が熱出して〔病棟に〕強制入院させられたものですから、わたしが、なんていうか、自由ができた。それで、自治会（こっち）へ来た。〔この自治会長は〕もう、まる6年です。

### 回復者であることを明示するほうがトラブルは起きない

〔平成15年に起きた黒川温泉宿泊拒否事件のときは〕まだわたしは自治会の常任委員ではなかった。

あれはねえ、〔熊本〕県が悪いんですよ。〔あの、ふるさと訪問事業は〕県が車を出して、“お里に、お帰りなさい、ご苦労さん、”という旅行でしょ。当時の県の職員が「ハンセン病療養所の入所者です」ってことを言わずに申し込んで、前の日かなんかにいきなり「〔ハンセン病療養所の〕入所者です」って言ったもので、むこうがびっくりした。そういう落度（なに）もあったんですよ。そんときの自治会がまた、それに食いついたからいかんのですよ。自治会は「これは県の仕事、県の責任だ」つって、ソッポ向けばよかったんですよ。自治会がまともに立ち上がったものだから、大事（おおごと）になっちゃったんだ。

わたしなんか、東京の全生園にいる頃から、どこに行くときでも、「多磨全生園入所者って書け」つって、堂々とホテルの入口に書かしたんです。この前も、ここの自治会ぜんぶで天草に飲み食い行ったんです。やっぱり、「菊池恵楓園入所者自治会って書け」と。〔そのほうがトラブルは〕起きない。

昔の温泉場というのは、あらゆる病気の人が行ったところが温泉場ですから。だから、温泉経営者ちゅうものは、なんもかもすべて承知でいたんです。わたしも社会復帰してすぐ、正月は秩父温泉へ行きよったんですけど、3、4日泊まって帰るときには、旅館主が「お大事にい」っち、こう言う。ありゃあ〔おれのことわかってるな、と〕。アハハハハ。〔温泉場の〕旅館経営者ちゅうものは、あらゆる病気を知ってます。

ですから、わたしが子どもの頃、うちの近くに長湯温泉ちゅうのがあるんですが、そこにもう、田植え引け、夏休み、冬休み、親父が温泉浸けするんですよ、わたしを。わたしは子どもでしょう。温泉に10日（とおか）も20日（はつか）もいてごらんない、田舎の山の中の。どんなに辛い思いしたか。その温泉場の旅館の娘さんが、その当時、女学校の何年生か覚えてないけど、わたしが行くと、わたしの病気を承知の上で、わたしを夜、自分の部屋で抱いて寝てくれました。昔の湯治場というものは、病気を嫌わないの。

〔予防法が廃止になって、裁判にも勝って、やはり、世の中、変わってきて

る]と思いますね。というのは、だいち、わたしが恵楓園(ここ)に戻って来てびっくりしたのは、わたしが[以前]ここにいた頃は、看護婦長なんか[わたしたち元患者に近づくのを嫌うふうでしたからね]。それがいま[看護をするのに]顔をひっつけてやっていますからね。変わりましたね。

この近所の人とも、トラブルはない。恵楓園(ここ)の人が、近所のうちの犬がかわいいからかわいがりに行くと、「犬を散歩に連れてってえ」。だからといって[もう問題がない、ということでもない]。将来構想のために、地域の人にはわたしたちをどういう目で見てるかというアンケートを取ったんですが、60歳代以上の人はだんだん理解ができてきているんですが、50歳以下の若い連中が、自分の仕事に忙しいもんだから、この[問題を]理解しようという頭のめぐりがなくて、昔のまんまのことが頭に入ってる。若い人ほど理解がない。

でも、いまは、どこに飲み食いに行っても、わたしはこんな顔して行くけど、病気のことバンバンしゃべるんですよ。わざとしゃべる。誰もそれに対して嫌な顔をしないし、べつにトラブルもない。飛行場からタクシー乗って、「恵楓園」と言えば「はい」。熊本市内に行っても、「恵楓園」「はい」。

#### 医者・看護師・職員の確保を訴え続ける

[園の将来構想?] われわれの60年間の運動でね、ここは医療機関として、そこらへんの独[立行政]法[人の病院]に負けないぐらいの施設、設備を持ってるんです。医者もちゃんとおる。お医者さんの20人の定員が、19人はいる。小児科と産婦人科がないだけ。わたしたちが60年間で営々と築いてきたこの立派な医療機関を[潰してなるものかという思いが強い]。これを維持するためにはどういう方法があるかということが、われわれの将来構想。恵楓園(これ)は国立ですが、県や市がなんらかのかたちで立ち入ってくるには、どうするか、ですね。

いま、わたしが声出してるのは、50床の病棟がここに3つあるんですよ。この3つの病棟がいつ、閑古鳥が鳴くか[を心配している]。2年先でもいい、5年先でもいい、なんとかこの150床の病棟を埋めるために、いま[世の中で]嫌われている[いわゆる]たらい回しの老人を引き込むことはできないか、ということ。

それとまたひとつは、職員さんが不安を持ち始めたんですよ。「われわれはいつまで働けるか、定年まで働けるのだろうか」という不安を持ち始めた。定年まで働けるんだよ、という安心感を与えるためには、われわれはここを施設として残さないかん。なんとかいい方法はないかなあ[と模索している]。いまの状態[のまま]ですと、10年後には、医者は半分になります。[半分の]10人になっても、なんとか、あまり今と見劣りがしない程度の療養所は維持できます。しかし、それでオッケー言うとなったら、とんでもないどんでん返しがくる。ですから、いま19人の医者がある、この状況[がどうしても必要]だと主張していく。それは無理っちゃゆうこと、わかっているんだ。わかっているけれども、たとえ空文(からぶみ)であっても、これを言い続ける。

[希望的要素としては、恵楓園は熊本大学医学部が]熊本医科大学[だった頃]からの長い付き合いがある。医科大学の頃に、インターンの医者(ひと)に、ここで給料を払ってた時代がありました。そういう人が、いま、お偉いさんですからね。ですから、その先生達(れんちゅう)がひじょうに理解があって、恵

楓園の要望があれば、どんな医者でもまわそうと〔してくれる〕。3年ここに勤めて、その人が大学に呼び返されたら、かならず代わりが来ます。だから、欠員は、いまのところはない。

### 検証するということ

〔県や地元行政の姿勢？〕こんどもね、蒲島〔郁夫熊本県〕知事も検証するということを約束しました。それから、〔合志市の〕新しい市長さんも、20日の日には第1回の、われわれとの懇談会をやります。

〔ただ、熊本県の「検証」は、付けた予算がはした金。〕「冗談じゃないよ。そんなことで検証ができるか！ 人件費だけでもそれじゃ足りない」と、わたしは言うんですよ。今朝も県庁から来ましてね、〔検証作業の草案を見せましたけど、わたしは〕「これではダメ」と。「わたしみたいに自分で〔療養所に〕来ても、社会で治療ができないからここに来たんだから、これも強制隔離なんだよ」と。「県が無癩県運動をやったんだから、その〔事実を一つひとつ押さえて〕箇条書きに作っていったものが検証である」と、そう言ってるんです。事実を〔積み重ねて〕、「だから、だから、だから、だから」という証明がない限り、われわれ〔として〕は、それは検証にならない。

多磨全生園の全療協〔本部〕にいたとき、わたしに抗議にくる入所者（ひと）もいました。「おれは、全生園に入れたから長生きしてるんだ」と。これも一理あるんですよ。社会でまんま食えない状況にさせられて、物乞いをして歩いた<sup>2</sup>。「療養所に入ったら、それをやらなくても、ただ飯食えた」ということを言う入所者（ひと）がいる。これも事実なんです。「でも、そこに至ることになった全体構造（こと）を、頭に入れないと話ができないよ」って。

ですから、裁判にも、かなり反対したの多かった。というのはね、ひとつは、自分の身内から「騒いでくれるな、騒いでくれるな」っていうの、けっこうあったらしくて。「おまえが何十年もこっから消えてくれたから、やっと、代が変わって住みやすくなりつつあるのに、また騒ぐか」「また、うちの一族を苛めるのか」という話も出てくるんですよ。だから、わたしの場合でも、わたしが電話入れて「帰るよ」って言うと、「どうぞ、兄さん」〔という言葉が返ってくる〕。〔でも〕弟から「帰っておいで」とは言わない。

### 血筋と世間と兄弟と

この前、父の二十三回忌のときに、弟夫婦が〔会いに〕来て、「兄さん、熊本に帰ってきたんだから、二十三回忌は、出席してくれんか」つった。「おれは帰らん」つったけど、迎えに来て、わたし、強制的に〔車に〕連れ込まれて帰ったんです。それで、うちで二十三回忌やって、弟嫁が「義兄（にい）さん。今晚は、この床の間で寝ちょくれ」ってこう言うから、「なにやあ」と。「おれ19歳から今日まで帰って来ちょらんのじゃがのお。自分の〔うちといっても、

---

<sup>2</sup> 2012年6月の補充聞き取りで、KMさんから、「物乞い」と、熊本地方で見られた「ケコミ」との違いをお聞きした。「〔本妙寺の〕参道で「〔お恵み〕ください」というのは、物乞いですね。ケコミは〔もっと〕横柄だった。「おれはライ病だ」ということを売り物にして、人を脅して、カネを搾り取ったのが「蹴込み」。『おれのコレを見てくれ。わしはコレですよ』〔とハンセン病特有の後遺症のある手先を相手の顔の前に突き出す〕だけで、人はカネをくれるわけです。」



ここでは]寝れんぞ」ちゅうたら、「義兄(にい)さんの生まれたうちじゃねえか」と。「生まれたうちであっても、わしや、ここで寝きらん。竹田のホテルに予約しろ」ちゅって、わたしはホテルに寝ました。自分のうちに寝きらんかった。

父が死んだときには、会社に弟が電話して、社長が花輪まで贈ってくれたんですよ。そして、「[親の葬式だから]帰れ」ちゅうから、「帰らしていただきます」。「しかし」実家(うち)には帰れんから、わたしはこの恵楓園に1週間いた。1週間目に弟に電話入れて、「初七日はどこでやるか」ちったら、「うちでやります」つったから、わたしは帰ったの。そしたら、2歳年上の従兄がそのとき町長していて、わたしが「ただいま」つって帰ったら、ピョッと立って、スーッと消えちゃった。

それがあったもんで、跡を取った弟が、「兄さん。初七日の日は、兄さんだけ一人、前に出る」つって、わたしをいちばん前に座らせたんですよ。それで、近所の連中が、「あん前に座っちよるのは、誰なええ」「ありやあ、ここん長男のMちゃんじゃわえ」って、わざと大きな声で言うんですよ。うん。それが世間。

父は長年、町会議員をやって、町会議長までやってたでしょ。[父の葬式には町じゅうから弔問客が来るから]とてもわたしが出る幕はない。みんな知っとるんだけどね。初七日のときでも、町の名士がズラァーッと並ぶ。わたしがヒョッとこうして見ると、みんな、チョッと顔をそらすんですよ。みんながわたしに目を合わせきらん。まあ、気の毒に思うんでしょうな、半面は。[この病気になってなければ]わたしは長男坊主だから、ここの親方になってんだな。

それが、二十三回忌のときにわたしが帰ったら、[例の]従兄は、町長辞めてたもんだから、「Mちゃん、よお帰ってきた、よお帰ってきた」「あんたの父ちゃんからな、お酒の、猪口(ちょこ)の握り方まで教えられてな。猪口の握り方ひとつで選挙に勝つんぞ、ちゅうて教えられた」っち。ほんとにまあ、子どもときから一緒に育った従兄弟同士。それほど血筋というものは、むつかしいもんがあるということやね。

わたしは[長らく社会復帰していたから、補償金は]最低[の800万円]でした。いちばん下の弟が、「兄さん、あんた、800万円が値打ちなん。情けない」ちって。でもね、こういうことがあったんですよ。いちばん下の弟が[大学受験を]通らんで。ずっこけて。父親から「このバカ」つって言われて。弟が「おお、バカなのは出て行くわ」つってから、東京にわたしを頼ってきたんですよ。で、専門学校出て。それが結婚して、間もないで、結核で血を吐いて、結核療養所に入ったもんだから、まだ誕生日が来ない娘っこを引き取って、わたしたち夫婦で育てたんですよ。そのわたしが育てた姪っこも、恵楓園(ここ)へしょっちゅう来て。子ども連れてね。

この前も、姪っこにわたしが電話入れてな。酒を箱詰め6本、持ってこらしたら、持ってきたのは持ってきたけど、帰ったら自分の父親から、その上の伯父さんからって、ぜんぶに電話入れて、「熊本のじいじいは飲み過ぎ」ちゅって。それで、跡を取った弟が夫婦ですぐ来てから、「兄さん、酒の飲み過ぎだよ」って。そう言いながら、ちょいちょい、男きょうだいだけ、4人ですけど、別府温泉で飲み会やるんですよ。そいで、この前なんか調子に乗っちゃってから。わたしの父親が79で死んだ。わたしが79のときに、酒に酔っぱらったみ

んなが、「今夜は兄さんの葬式出そうじゃないか。葬式だ、葬式だ」ってなもんですよ。もう、ほんとに困ったもんだ。しかし、たとえ腹違いであっても、父親が偉かったのかなあ、みんなわたしを想ってくれてますよ。ただ、その血筋の一族に気兼ねをしてるだけであって。兄弟、仲いいんですよ。

〔わたしは〕いまは、糖尿病だし、肝臓が悪いし、血圧は高いし。老人病、みんな持ってます。それに、前立腺ガンもやりました。〔しかし〕わたしは口養生はいつさいしません。酒も飲みます。でも、毎月1回、血液検査をしていますけど、全然悪くなってない。不思議ですな。

## A Life Story of a Man Who Survived Segregation Policy: An Interview of a Resident in Kikuchi Keifuen

Yasunori FUKUOKA and Ai KUROSACA

This is the life story of a man who was an ex-patient of Hansen's disease. KM, the interviewee, was 80 years old when we conducted this interview. The interview took place in Kikuchi Keifuen, one of the national Hansen's disease sanatoriums in Japan, in December 2010. He was the president of the Association of Kikuchi Keifuen Residents at the time. His narrative shows us the reality of his life during and after World War II, under the Leprosy Prevention Law.

KM was born in Oita in 1930. When he was 12 years old, he entered Keifuen. In 1945 the sanatorium was attacked by U.S. military aircraft, and some residents were killed. He was able to survive by jumping into a bomb shelter which he and other young residents had dug. He was deeply relieved when he heard the news that the war had ended.

In 1950, he married a woman who was also a resident of the sanatorium. At that time Keifuen residents lived in *zakkyo beyas*, where men and women were forced to live separately in crowded conditions. There were not any dormitories for couples yet, so KM had to go to the woman's dormitory to see his wife. When his wife got pregnant, she hid the fact not only from the sanatorium authorities but also from him, because she knew that if the authorities found out, the pregnancy would be terminated. In the seventh month of pregnancy, the authorities and KM discovered her pregnancy. She was forced to have the abortion.

When KM was 30 years old, he left the sanatorium with his wife, and they lived outside the sanatoriums in Tokyo for 29 years. The boss of an accessory craft company hired him knowing he was an ex-patient of the disease. KM was able to work for the company until retirement. However, he and his wife faced discrimination and had to change their apartment three times because of discrimination by their neighbors.

They were unable to find housing, and entered Tama Zenshoen, a national Hansen's disease sanatorium in Tokyo. KM experienced the Hansen's Disease Government Liability Lawsuit (1998–2001) as a member of the central executive committee of the All Japan-Association of Hansen's Disease Sanatorium Residents. In 2000 he returned to Keifuen with his wife and lived there until he died in 2015.

**Keywords:** Hansen's disease, segregation policy, Leprosy Prevention Law, life story